
雨の日の夕暮れ

カタマリ様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日の夕暮れ

【Nコード】

N0379U

【作者名】

カタマリ様

【あらすじ】

気が小さく、静かな俺。そんな俺に変化を与えたのが、転校生のあの子だった……。

雨（前書き）

初めて書いた作品なので文章もめちゃくちゃでストーリー支離滅裂ですがどうか温かい目で見てください。

雨

あたりは暗くなり始めていた。
叫んだときにはもう遅かった。
もう彼女と会う事はないだろう……。

「ジリリリリ！」

今日もうつとつしい目覚まし時計の音が響く。

「ちっ」

舌打ちをして布団から出る、外からしとしと音がする雨でも降っているのだろう。

なんとなくだるい、朝食をとる気にもならない、雨のせいだろうか。とにかく俺は、着替えて学校に行くことにした。

学校についても気分は変わらない、ぼんやりしているうちに朝の会が始まる。「だるい。」

しかしそんな気分は一瞬にして吹き飛んだ。

「大屋が転校することになった、じゃ大屋、一言よろしく」

「みんな短い間だけど仲良くしてくれてありがとう」

「えー」

「うそー」

「だってまだ出会ったばかりじゃん」

クラスメイトは困惑を隠せない、それは俺も一緒だ。

おおやあきこ
大屋彰子が転校してきたのは1カ月前だ。親の都合で転校を繰り返しているのは聞いていたが、こんな早い別れになるとは。

そう1か月前、彼女は転校してきた、さらつとした長い髪の毛、整

った顔つき、そして明るく話しやすい性格。彼女は瞬く間にクラスの人気者になった。

俺はクラスの中では、あまり目立たない存在だから、彼女に話す機会はあまりなかった。でも俺は彼女のことを好きになった。なんとかして会話しよう、この思いを伝えようと1カ月頑張ってたのに……。

彼女が転校してきたのは、今日のような雨の日だった。暗い教室、クラスメイトも今日の俺のような気分だっただろう。しかし彼女が教室に入ったとたん、太陽が突然、現れたかのようにクラスが明るくなった。彼女は俺の後ろの席に座った、男子から羨望のまなざしを受けたのは言うまでもない。おれは彼女に話そうとした、でも彼女は、俺なんか相手にせず他のやつと話していた。

「相手にされなかった、悔しい。」

彼女が転校してきた次の日、昨日と同じように雨が降っていた。大屋は今日も人気者だ、話すチャンスはもちろんない。いや、あった、3限目の終わりがくると俺は、消しゴムを落とした。消しゴムは彼女の足元へ、彼女は、それを拾って俺に渡してくれた。

「落としたよっ。」

かわいい。

俺もお礼を言おうとした。

「あ、あ、あり……。」

うまくいえなかった、緊張して舌が回らない。顔がみるみる赤くなる。何もなかったかのように俺は前を向く。無視してしまった。彼女はつまらなさそうな顔をしている。

俺のその後の気分は最悪だ。雨も手伝って、気分はさらに暗くなる。周りから見たら相当怖いはずだ。そんな雰囲気を出している俺に彼

女が話しかけてくれるはずがなかった。

学校が終わり、家に帰るといろいろ考えた

「彼女の気を引くためには何をしたらいい？」

「わざとぶつかる？」

「共通の話題を見つける？」

「消しゴムのこと謝る？」

しかし答えが見つからないまま俺は、眠りについた。

朝起きる寝起きはものすごくいい。外は昨日とうってかわって雲ひとつない晴天だ。ものすごく気分がいい。

朝食をとり、着替えて学校に向かった。

その途中俺は、なぜか一大決心をした。

「大屋と話す」と。

チャンス

学校につく。

なぜか教室に行くことさえドキドキした。

教室に入る、彼女はまだいないようだ。緊張する。なんて話そう。と考えていたら急にドアが開いた。

「おっはよー」

彼女だ。僕もすかさず。

「おはよう！」

とあいさつしようとしたが

「お、お、お……」

昨日と一緒だ、緊張して舌が回らない。

またチャンスを一つダメにした。しかし今日の俺は、一味違う。なぜなら一大決心したのだから。

「チャンスは自分から作るものだ」

そう考えた俺は、わざと消しゴムを落とした。

だが、彼女は何も言わずに消しゴムを俺の机の上に置く。作戦失敗だ。しかし今日の俺は違う。

「あっしまった。」

わざと声を出して消しゴムを落とした。

しかし今回も彼女は無言で、机の上に置く。何回同じことをやったことだろう。その時気付いた。

「作戦失敗だ」と。

しかし俺に思いがけないことが起こった。授業中に彼女が消しゴムを落としたのだ。消しゴムは僕の足元まで転がってきた。おれは思わず拾い上げ。彼女の机の上に置いた。

「ありがとう」

彼女は言った。かわいい。

俺は、ここで決めると心に決心して。

「ど、ど、どういたしまして・・・。」と
小声で言った。

記念すべき通算第一回目の会話成功の瞬間だった。

その日の俺の気分は最高だった。何回も会話のシーンを思い出し、一人でクスツと笑った。相当気持ち悪かったはずだ。女子の陰口が聞こえてきた。

しかしそんなこと関係ない素直にうれしかった、もう一度話そうと奮闘したが、今日これ以上の収穫は得られなかった。

その夜、また俺は、今日の会話のことを思い出しにやにやしていた。
「明日はどうしてやろう。」

なんて考えながら眠りに就いた。

夜中、急に目が覚める

「トイレに行こう」

そう思った俺は、トイレに向かった。しかしその途中階段から滑り落ちる。

「どおおん」

ものすごい音がした、親があわてて部屋から飛び出す。幸い擦り傷程度だったが、とにかく痛かった。しかしその最中、俺は思いついた。

「これしかない」

「これでいこう」と。

朝、目が覚める、俺は昨日思いついた作戦を練り直し完璧なものに

仕上げた。

これが作戦ノートの内容だ←

作戦ナンバー2

概要

昨日のことをネタに彼女を笑わせる。

詳細

給食の時間に何気なく近くの男子に話しかけ、昨日のことを話す。そこに彼女が食いつき俺の話を聞く。

備考

失敗時には臨機応変に対応

学校への足取りは、軽かった。なんだか彼女との距離が近づいたような気がした。

学校に着いた。俺は、覚悟を決めて教室のドアを開いた。

会話

「がらっ」

教室のドアを開ける、俺の顔はこわばっている。みんな首をかしげながらこちらを見る。

しかし、今はそんなことどうでもいい。彼女は、席に座っていた。思い切って

「お……おはよう」とあいさつした。

決まった、我ながらと思いながら、彼女の返事を待つ。

「おっはよー」

明るいいあいさつが返ってきた。やっぱりかわいい。
今日はイける、そんな気がした。

「キーンコーンカーンコーン」

授業が終わった、給食の時間だ。この時間のために俺は、ずっと緊張していたし、作戦も完ぺきに練った。いくしかない。

配膳が終わり、会食の時間だ、ドキドキする。なかなか言い出せない。

「あ……あの……」

隣のやつにも聞こえない。

意を決して隣のやつに。

「お……お……俺さああ……」

と話しかけてみた。

「ん、何？珍しいなお前から話してくるなんて」
当然だ。彼女と話すためなら、なんでもするつもりだ。

「昨日、と・とトイレに行こうとしたら、か・か・か階段から落ちた。」

「はっはっはっはっは」

「話はどうでもいいけど、嘔みすぎだろ、力抜けよ同級生だろ。」

「そ、そ、そうだね。」
作戦失敗だ。会話が終わってしまった。なんで俺はいつもこうなんだ。

しかし、思いがけないことが起こった。

彼女が笑っているのだ。もちろん俺のことで。

目が合う、彼女から微笑みかけてきた。俺もにこっと笑顔で返す。そうこうしているうちに給食が終わった。

今日も俺は、すこぶる機嫌が良かった。彼女のあの笑顔を思い出しながら、時折にやにやする。だが、その後は、先日同様ないた収穫はなかった。

しかし俺は、彼女を笑わせたことに大満足で、軽い足取りで家に帰った。

その晩、俺は、考えた。今度は、しっかりとした会話をしよう。作戦なんかいらぬ。強い決意とともに、俺は眠りについた。

誤（前書き）

久々の更新です。本当にすみません。

誤

「俺はただ、お前と仲良くしたいだけなんだ。なんでわかってくれないんだ。」

しかし彼女は、決して振り向くことなく俺の前から姿を消した。

「待ってくれ!!」

汗びっしょりで起きた。ただ今の時刻6時24分。いつもの起床時刻より、1時間と6分ほど早い目覚めだ。窓の外は、うつすら真夜中の余韻を残している。

「何だったんだ、今の夢は。」周りを見渡し大きく一呼吸おいて早足でリビングへ向かった。

母は、もう起きていた。「どうしたのこんな早くに?」というありきたりな質問を軽く流し朝食を済ませた。

その後、特に母と会話することもなく、家を出る、時刻は7時05分。普段ならまだベットのの中ははずなのだが今日はなぜか制服を身にまとっている。不思議な思いにとらわれながら道を進む。「しかしなぜか、とてつもなく大きな違和感が俺の後ろに、付きまとっている。」様な気がした。

学校が始まるまでまだ1時間以上ある。

「そうだ!」あることを思いついた俺、一応思いつきには忠実に動くように心がけているが、なぜこのように考えたか自分でも全く見当がつかない。

「遠回りしよう!」、ということで普通に行けば、最高24分32秒、遅くても30分あれば学校まで行ける道のりを、今日は、あえて遠回りをするということになった。

いつもと違う道、普段なら人でいっぱい道であるはずなのに今日は閑散としている。道を変えるとやはり景色も、何もかもが全く違う。なんともいえぬこの感覚を一步いっば、肌とその他器官すべてで感じ取り、体全体がこのなんともいえぬもので満ち溢れていた。

ふと、目を横にやる。そこには、なんともいえぬもので満ち溢れている俺にとって、許容範囲をはるかに超す。もう破裂寸前まで追いやられるものだった。

そこには、確かに「大屋」と記されていた。

俺は思わず言った「ここが奴の本丸か、いざとなったらここをたたく。小さなアパートの一階、右から三番目だ。忘れるな」そして俺は、5分ほどその場を動けなかった。なぜなら、彼女が出てくるかもしれないからだ。しかし、期待とは裏腹に、ドアは、微動だにできなかった。

しょうがなく学校へ向かう、最大パワーを発揮するために充電中の太陽を時折見つめながら、小さな非日常が、学校に着くという事で終えようとしていた次の瞬間。目の前にありえない光景が映った。大屋さんだ。あのさらっとした長い髪の毛は、大屋さんそのものだった。しかし、今日は、学校なのにその大屋さんは、制服を着ていなかった。もちろん、私服を着ていた。そのことを疑問に思いつつ、前へ進むと、彼女も首をかしげながらこちらを見てきた。そして、5秒にわたるお互い目だけを合わせて会話をしない、「冷戦」状態に陥った。しかし、この均衡を打ち破ったのは、彼女の発言に他ならない「大屋大佐」が口にした言葉は、あまりに衝撃的で、こちらの勢力がすべて陥落したに等しかった。

「なんで制服着てるの？今日は、土曜日だよ！」

そうだが、とてつもなく大きな違和感の正体だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0379u/>

雨の日の夕暮れ

2011年10月9日07時54分発行